

<当日配布プログラムで紙幅の事情でカットした完全バージョンをお届けします>

秋の定期演奏会 プログラム・ノート

太田 務(神戸市混声合唱団 副指揮者)

## モテット集より アントン・ブルックナー (1824-1896)

ブルックナーはオーストリア生まれの作曲家であり卓越したオルガニストでした。同時代を生きたドイツ出身のヨハネス・ブラームス (1833-1897) と共に、音楽史に大変重要な教会音楽の合唱作品を残しました。特にモテット (彼らロマン派の時代においては、各々の声部が重要性をもつ多声的な宗教曲のこと) に関しては、ブラームスはプロテスタントの流れをバロック後期のヨハン・セバスティアン・バッハ (1685-1750) のドイツ語のモテットを、一方ブルックナーはルネサンス期のジョヴァンニ・ダ・パレストリーナ (1525頃-1594) のラテン語のモテットを手本にしました。

ブルックナーのモテットは敬虔なローマ・カトリック信者としての信条と彼の信仰心の滲み出る音楽となっています。当時カトリック系作曲家の中で重んじられていた「セシリア運動」に敬意を払い教会旋法やグレゴリオ聖歌のような旋律美を求めつつも、古典派で大切にされていた「客観性とバランスの取れた、抑圧され高貴で保守的なアプローチ」に対して、ロマン派の根底概念である「主観性を大切にし、過度なまでの個人の気持ちの表現」を基に 34 のモテットを書きました。シークエンスを利用した感情の高揚の楽音的模写、ダイナミクスシフトによるドラマティックな楽音のコントラスト、パイプオルガンの音域を感じさせる幅広い音域と低声部の確固とした基音の上に積み上げられる倍音を味方につけた厚い和音構成、そしてテキストの内容をより主観的に表現するための半音進行による複雑化した和音進行などを大いに活用して、詩の内容の表現に力を注ぎました。

**Locus iste この場所**は 1869 年に作曲されました。テキストは聖堂献堂式のミサの栄光の賛歌「グローリア」の後に歌われる昇階唱しょうかいしょう (グラデュアーレ) です。このモテットはドイツの都市リンツに建てられた新しい礼拝堂の献堂式で捧げられた、喜びと感謝に満ち溢れた祈りです。静けさの中に歌い始められ、基本的に縦の揃うホモフォニック (和声的) に書かれており、和音の変化の重なりが、目に見えぬ神の恩寵が目に見える形で施されたこの特別な「場所」に対する感動を表しています。

**Ave Maria ようこそマリア** 音楽史上、多くの作曲家を魅惑してやまない聖母マリアへの賛歌を、ブルックナーは 3 声の女声合唱と 4 声の男声合唱の対比を用いて作曲しました。神の子の名前 Jesus を、音量を上げつつ劇的に表現する所は、聖堂のパイプオルガンの音色を全開にした神々しさがあります。最後は 4 声のホモフォニーで静かに祈り終えられますが、二つに分けられたアンサンブルの対比と豊かな和声的響きは、イタリアのサン・マルコ寺院を拠点とし、ルネサンスからバロックにかけて繁栄したヴェネツィア楽派の作曲形式を思い起こさせます。

**Virga Jesse エッサイの若枝が** ミサのなかでは「アレルヤ唱」として、昇階唱に続いて賛嘆し歌われるものです。旧約聖書のイザヤ書第 11 章 1 節が基となった、クリスマスにたおやかに歌われる讚美歌「エッサイの根より」と同じ内容を歌うモテットです。ブルックナーはダイナミクスやハーモニーのシフトを使いドラマティックにまとめ、シークエンス (ゼクヴェンツ) と呼ばれる、同じ動機を繰り返す事により音楽的高揚を使い構成を立体化させ、精神的な緩急を付ける事により作品に奥行きを持たせました。そして高らかに表現される「アレルヤ」は、その興奮と感謝を心に残しつつ静かに締めくくられます。

**Christus factus est** キリストは私たちのために 聖週間の聖木曜日ミサの昇階唱として歌われるものです。ブルックナーはこのテキストを彼自身の大変大胆な手法で作曲しました。和音進行においては、彼のモテットの中でも大変冒険的なもので、旋律的にも和声的にも、ロマン派らしくドラマティックであり、かつブルックナーらしい敬虔さを失わないテキスト・ペインティング（歌詞の持つ内容を楽音で象徴的に表そうとする方法）で表現されています。特筆すべきは、このモテットの約半分以上が、最後の5つの単語「quod est super omne nomen、全ての名を超えたその名を」の表現に充てられた事でしょう。6回程繰り返されたこのテキストは、各々の箇所ではテクニクが変えられ、大いなる感情の高揚で高らかに、最後には熱を帯びた敬虔さをもって静かに歌われます。

## 水のいのち 高田三郎 (1913-2000)

この作品は1964年11月に初演されたものであるから、もうすぐ還暦を迎える事になります。我が神戸市混声合唱団でも1989年の創設以来数多くの演奏機会を持っております。また指揮者によってこの作品に対する独自の解釈があり、その時その時の演奏で奏でられ響く楽音は異なっています。それだけこの作品は、演奏する人の感性の度合いの中での存在の在り方を千差万別に変えることのできる、奥の深い合唱作品です。高田三郎は熱心なカトリック信者であったので、この作品が宗教的な響きを持つことは不思議ではありません。また詩人高野喜久雄(1927-2006)は、円周率を求める新公式を1982年に見つけるほどの数学者あり、その奥深い感性から紡ぎ出される哲学的な詩からインスパイアされた高田三郎の音楽は、「水」というこの惑星の上で循環している尊い物体を概念化した一つの小宇宙と言っても過言ではないでしょう。

**1. 雨** 地上の全ての創造物に平等に分け与えられる無償の愛を表現するかのような楽章です。その愛の微笑みの色合いや流れ方が、テキストによって優しく誘われてダイナミクスや情緒性のシフトになっているようです。ピアノはこの楽章を通して基本的に左手の低音域における分散和音と、右手のオスティナートの動きは、こちらも落ち着いた響きのでる中音域をもって、慈愛の雨の表現にふさわしいものです。

**2. 水たまり** 「どこにでもある水たまり」に私たちを重ね合わせ、その表面と水、そしてその下にある厚さを持った「泥」から成る構造を、人間の精神の一個体として表現しています。簡単に考えると水たまりは雨が降ればでき、陽が照れば干上がってしまうもの。しかし水たまりには純粋なものでない「泥」が必ず存在し、その深さが理性によって制御できない心の働きとしての業の深さとなり、私たちを悩ませます。しかし、その濁った水でさえはるか遠くの穢れない場所への想いがあるのです。その心に憧れをもち歌われるものです。

**3. 川** 前楽章よりスケールの大きい、起承転結のはっきりとした地学的形態「川」と私たちを重ね合わせているので、「みずたまり」より、一層主観的で感情の溢れる作風になっています。液体として川は高い所から重力に逆らえず下の方に流れていくもの。この詩は高野喜久雄のもともとの詩に手を加えられたものです。そのオリジナルの詩に「もっと美しいのは その隠された苦しみだ」と書かれています。この「隠された苦しみ」を何かと問わず、それが何であれ同じ苦しみをもって私たちは担うことが必要である、というメッセージでしょう。

4. **海** 日本語の海はその中に母があり、フランス語では母 *mère* のなかに海 *mer* があります。海と母は互いに大きな関係をもち、全ての命の源と考えられます。そしてそこから生まれ出たもの全ては、その海に向かって帰っていきます。清いものも汚れたものも、分け隔てなく受け入れてくれます。そして全てを浄化して、各々が行くべき場所へと導くのです。その母の姿を、現在の私たちはどのような気持ちで見れば良いのでしょうか。

5. **海よ** 水は私たちの地球の表面積の 70 パーセントを占め、その体積のほとんどは海として存在します。無数の海洋生物がその生命を直接海に預け、共に息づいています。地球規模の水の大きな循環サイクルの発動源は海なのです。地球が生まれた時から全ての始点であり、そして終点であったのでしょうか。この壮大な海への賛歌を高らかに、この水の惑星に住む者として誇りをもって歌いたいものです。

#### 小室内カンタータ ある雪の夕暮れ *Un soir de neige* フランシス・プーランク (1899-1963)

プーランクはフランスの製薬会社の創設者の父を持つ、裕福なカトリックの家庭に生まれました。彼は卓越したピアニストであり、作曲家としてオペラをはじめ、幅広いジャンルの作曲を行いました。その中でも彼が最も大切にしていたものは *mélodie* (仏：歌曲) であり、その作曲において優れた名人でした。「僧侶とやんちゃな子が共存している」とたとえられた彼の性格と、生まれつきのパリジャンの気質を持った彼の作風は常に機知ウィットに富み、その旋律はフランス語独特の律動的な言い回しデクラマシオンに忠実です。彼は詩と音楽の調和を絶えず求め、模写的な表現を好み、特に和声的な取り扱いはまるで絵画を見ているように視覚的に捉えることのできるものです。

小室内カンタータ **ある雪の夕暮れ** の詩は、プーランクの友人であったフランスの詩人ポール・エリュアール (1895-1952) によるものです。第二次世界大戦ではナチス・ドイツによるフランスの占領における言論と思想の弾圧に抵抗するために、抵抗運動レジスタンスを支持しつつも直接的な表現を避けた多くの詩を書き、地下出版を通し発表しました。**ある雪の夕暮れ** のために選ばれた 4 つの詩もレジスタンス詩集で、占領下における切実な生活や自由を詠った《詩と真実 (1942)》と《生きるに値する人々 (1944)》に収められています。これらの詩はチラシやガリ版刷りで手から手へ渡り、口から耳へと伝えられました。プーランクは《詩と真実》の全ての詩をほとんど受け取っていて、曲としての創作の想いをめぐらしていました。1944 年 8 月パリは解放され、このカンタータはその年のクリスマスに作曲されました。

**De grandes cuillers de neige ... 巨大な雪の匙きじが** フランスを占領している力を『雪の匙』と例え、それに対抗するレジスタンスを女声高声部の斉唱で歌い始められます。そのレジスタンスの響きは、今までの平穏な世界を懐かしむ優しい響きによって遮られます。しかし現実はその冬に対抗する術も無いことを訴えるのです。

**La bonne neige... 綺麗な雪** まるでつきまとい追いかけて来る捕食者から雪深い森の中を逃げ惑うような焦燥感。このレジスタンス詩の持つスピード感と感情を、ありのままの姿で聴くことの出来る作風です。

**Bois meurtri ... 傷ついた森** 冬の寒々とした森の中で、雪に襲われ凍り付いた大きな船。それはまるでフランス国土の中心に位置する占領下の都パリの様。プーランクはこのホモフォニックな作品を通し、テキストの持つメッセージをキュービズム（立体派：ピカソらによって創始された絵画様式。物体の様々な視点からのコラージュ的模写）的な和声の効果を、テキスト本来の音声的美をさらに打ち出しつつ描いています。

**La nuit le froid la solitude 夜 冷たさ 孤独** この詩は自由を奪われた者たちに希望の光が見え始め、最後には全ての枷から抜け出し、新たな自由の獲得を高らかに詠います。カンタータ ある雪の夕暮れ が作曲されたときには、既にパリは解放されて4か月経っています。この終曲は占領の終局への物事の移り変わりを輝かしく表現します。そして勝利を確信したトランペットのファンファーレがこの組曲的なカンタータを華々しく締めくくります。

オペラ **ポーギーとベス** *Porgy and Bess* ジョージ・ガーシュウィン (1898-1937)

ユダヤ系ロシアの移民の息子として生まれたガーシュウィンは、ジャズのスタンダード・ナンバーの**アイ・ガット・リズム** (1930) や、リスト風のロマンティシズムとジャズの融合したピアノ協奏曲形式の**ラプソディ・イン・ブルー** (1924) などを世に送り出した、20世紀初頭のアメリカを代表する作曲家です。マンハッタンで貧しい子ども時代を送りながらも、天性の音楽的才能により直ぐに作曲者・ピアニスト（ラプソディ・イン・ブルーの初演ではピアノを担当）・指揮者として頭角を現していきます。そしてその38年という短い生涯で打ち立てた金字塔が、ダンスやジャズを含む黒人の音楽がふんだんに含まれたオペラ**ポーギーとベス** (1935) といえましょう。時代は20世紀初頭、アメリカ南部の海辺の黒人街『なまず横丁』で繰り広げられる、足が不自由で人からの施しによって生きるポーギーと、荒れた暮らしを送るベスに対する愛の物語です。

**Jasbo Brown Blues ~ Summertime ジャズボ・ブラウン・ブルース～サマータイム** “ジャズボ・ブラウン”は伝説の黒人の流しのピアニストで、このオペラの内容には関係を持たない人物です。しかしパンチの利いた彼のブルースと、それに唱和し踊る『なまず横丁』の住人の醸し出すムードは、一気に私たちが彼らの空間に誘います。このオペラを代表する子守歌のアリア**サマータイム**が、漁師を夫に持つクララによって歌われます。黒人たちの過酷な暮らしの中にも、自分の赤子の無事な成長と自由な未来への希望する、健気な母の祈りです。

**Where is Brudder Robbins? ~ My man's gone now ロビンス兄さんはどこへ行っちゃったの?～私のあの人はもう死んじゃったのよ** いつものように『なまず横丁』でサイコロ賭博が行われ、言い争いが起こりベスの内縁の夫で乱暴者のクラウンは漁夫のロビンスを殺してしまいます。『横丁』の住人はロビンスのことを「先ほどまでは元気だったのに、もう彼はいない」と驚きます。ロビンスの信心深い女房セリーナの嘆きのアリアが、住人の悲しみの感情をかき立てていきます。

**I got plenty o' nuttin'** おいらには何もないけど クラウンはロビンスを手にかけてあと『横丁』を足早に去り、以前からベスを想っていたポーギーは彼女を匿い、二人は恋仲になります。これまでの暗い性格だった彼は、ベスを彼女に持った喜びを陽気に歌います。皆も彼の変化に驚き、納得しつつ共に喜ぶシーンです。

**It ain't necessarily so** そんなのはどうでもいいことだぜ 洒落者で狡猾な麻薬密売人のスポーティング・ライフによって先導されて歌われます。この歌は黒人霊歌の1つの《呼びかけと<sup>コ</sup>応答<sup>ル</sup>》という形式を取っています。そのスタイルはかつての奴隷制度がしかれた頃の黒人の集会では、リーダー的な人物が聖書の中の解放に関する話を皆に聞かせ、簡単なフレーズで感動した聴衆が唱和するものです。スポーティング・ライフは逆に墮落の良さを説くのです。

**Oh, I can't sit down** もう座ってなんかいられないよ 『なまず横丁』にも、大変エキサイティングなピクニックの日がやってきます。楽しいことの大好きな『横丁』の住人の喜びは尋常ではありません。ただ、ベスと一緒にいけないポーギーの事を思い、『横丁』に留まろうとしますが、隣人のマリアに半分強制的に連れ出されます。

**Oh, Lawd, I'm on my way** おお、主よ、私はまいります 喜んでベスをピクニックに送り出したポーギーですが、ベスはピクニック先でクラウンに出会います。体調を崩して帰ってきたベスを見て、激怒した彼は乱闘の末クラウンを殺してしまいます。ポーギーは警察に連れていかれた後、スポルティング・ライフは残されたベスに執拗に迫りニューヨークへと連れ去ります。警察から戻ったポーギーは、ベスを連れ戻すために、信仰を胸にして山羊に引かせた車に乗って旅立つのです。